

氣ノ上騰スルニ係ル又其天象ヲ見ルニ濃雲四方ニ起リ上騰  
シテ融解スルガ如キ其一證ナリ

同廿九日海中松魚夥シ二三日午前ヨリ水夫共船首へ出テ或ハ  
釣或ハ叉シ終ニ四五尾ヲ得タリ

五月五日朝六時半遙カニ山ヲ見ル即チ房州洲ノ崎ナリ是ヨ  
リ針路ヲ轉シ順風ニシテ浦賀ニ入り投錨

同六日午時浦賀港出帆夕四時神奈川ニ至リ雇入レシ米國水  
夫同國コンシユルへ引渡夫ヨリ夜ニ入り品川灣へ投錨一同

歸着ス

我艦布哇島出帆ニ際シ全國官局ニハ暫時ノ處ニテ其期ニ  
後レシ故如左同日附之書翰等ヲ差立テ、後日到達セシ者  
ヲ爰ニ附記ス

ホノル、

外國事務ノ官局

日本蒸氣コルヘット船ノ甲比丹

ル、セ、井ルリ

勝麟太郎執事

ハワイセン王ノ公用ニテ書ス

千八百六十年第五月二十六日

外國事務ノ官局ヨリ

日本蒸氣コルヘット船咸臨丸ノ甲比丹

勝麟太郎執事ニ呈ス

僕吾カ皇王ノ爲ニ足下ノ陛下ニ贈奉セル刀子ト畫圖トニ就  
テ其辱キヲ拜ス「明年吾王女王ト共ニ貴國ノ高大ナル皇帝ヲ  
訪ヒテ其好意ヲ確知シ以テ如此天惠ニ依テ相比鄰セル兩國

久ク親懇ノ交ヲ結バント欲スルヲ略々決定シタリ日本人トハワイセン人ハ世界ノ造物主ノ甚相近比シテ造ル所ナレバ兄弟ノ如ク相愛セズンバ非ズ僕亦足下ノ大ナル親懇ヲ表シテ余ニ布匹ヲ惠投セルヲ辱クス足下既ニ開駛セントスルニ臨ミ吾ガ王歸程ヲ祝スルニ暇ナシ故ニ此王家ノ紀念トシテ僕今陛下ノ記號ノ圖ヲ贈致ス僕又我カ爲ニ上件ノ圖ニ附シ贈ル所ノ吾寫真ヲ受ケンヲ乞フ僕亦足下ニ乞フ足下提督ニ會面セバ吾ガ禮意ヲ述べ提督及ビ足下並ニ凡テ日本ノ官司我王ニ覲見シタル時陛下甚タ歡喜セリト報ズベシ是ヲ以テ吾王大良友タル日本ノ強大ナル皇帝ノ懇交好意ヲ益々培養センナリ是神ノ保佑スル所ナリ僕且足下並ニ僚屬ノ官司吾カ恭敬ヲ表スルヲ諒察センヲ乞フ是ヲ以テ僕足下ノ

下等賤役トナリ服従スルヲ得ルノ辱キヲ拜ス

ル、セ、井ルリ

千八百六十年第九月三日ホノル、府ニ於テ外國事務ノ官局ヨリ

日本蒸氣コルヘツト咸臨丸ノ加比丹勝麟太郎足下ニ呈ス  
第五月二十六日ノ書翰ハ足下ノ船ニ送ル可キニ既ニ出帆セシ故ニ之ニ添へ送ルナリ

國政評議ノ會合ニ就テ國王並ニ宰相ノ詞ヲ書寫シ之ヲ刊行シタル書及ヒ評議官ノ議論ヲ刊行シタル小書ヲ余今足下ニ送ル

我總頭タル國王ハ大良友日本陛下ノ安康幸福ヲ知ラシメテ甚タ希フ

都督足下士官水手並ニポウハタン船ニテ此地ニ來リシ使節  
閣下ノ安穩ニシテ日本ニ歸着セシ哉王並ニ宰相是ヲ知ラシ  
コヲ甚々請フ

余都督並ニ足下ニ改テ尊恭スルノ證ヲ示サシ事ヲ請フナリ  
謹言

アルシ、ウヰルリ

一書狀 貳通

但本書副書共

一珊瑚維島王家之記號之圖 壹枚

一寫真肖像 壹箱

一新聞紙 大六枚 小六枚

一貳ヶ年分官府ノ告牒 四册

但國內議政官軍中機密史財政司外國事務宰臣四局之  
告牒ニ御座候  
右珊瑚維島外國事務宰臣ヨリ勝麟太郎へ送り越シ候品ニ御座  
候

西 周助 謹譯  
堀 達之助

文久元年辛酉三月咸臨丸亞國ニ於テ修繕ノ謝儀トシテ左之  
通合衆國政府へ贈ル

大統領殿下へ

一黃金造太刀 壹振

一緋威金小核甲冑 壹揃

一梨地象嵌鞍籠 壹揃

一双龍高彫黄銅花瓶

壹對

一詩繪書棚

壹架

一屏風

貳双

一色襦子

拾五卷

一紋縮緬

拾匹

一紅白縮緬

拾匹

亞米利加國サンフランシスコメリーアイラント

造船場總督へ

一拵附大小

壹腰

一詩繪料紙硯箱

壹組

一紅白縮緬

五匹

同所甲比丹へ

一白鞆大小

壹腰

一七寶燒花瓶

壹對

一紋縮緬

三匹

同所官吏五人へ

一紋縮緬

三匹

サンフランシスコ港頭領へ

一紋縮緬

五匹

同所官吏プロツクスへ

一紅縮緬

三匹

同所病院醫師貳人へ

一紅縮緬

貳匹

以上

万延元申年五月廿六日大和守達

小野友五郎

常々測量等厚心懸今度亞米利加國へ爲御用被差遣候處航海中も格別骨折學業宜敷仕候段達

御聽候依之御序之節

御目見可被仰付候

同年六月朔日

御目見相濟

同年十二月朔日

金十枚  
時服三

木村攝津守

亞墨利加國に罷越骨折候ニ付被下之

同人

亞米利加國に御軍艦被遣候義ハ

御國初以來初而之事ニ候處數千里之航海無滯御用相勤格別骨折候ニ付出格之譯を以年々爲御手當御扶持

方二十人扶持被下之

右於芙蓉間老中列座對馬守申渡之

金五枚  
時服二

勝 麟太郎

右同斷

同 人

亞墨利加國江御軍艦被遣候義者

御國初以來初而之事ニ候處數千里之航海無滯相勤格別骨折候ニ付出格之譯を以年々爲御手當御扶持方七人扶持被下之

右於御右筆部屋縁頼老中列座對馬守申渡之

金三枚  
時服二

伴 鐵太郎

右同斷

金二枚

同 人

亞墨利加國江御軍艦被遣候義ハ

御國初以來初而之事ニ候處數千里之航海無滯御用相勤格別骨折候ニ付別段爲御褒美被下之

右於同席列座同前同人申渡之若年寄中侍座

銀五拾枚  
時服二

小野友五郎

右同斷

銀三拾枚

同 人

右同斷

右於檜之間同人申渡之

銀五拾枚  
時服二

佐々倉桐太郎  
濱口與右衛門

右同斷

山本金次郎

銀三拾枚充

同前 三人

右同斷

右對馬守命ニ因リ軍艦奉行木村攝津守申渡之

鈴藤勇次郎

肥田濱五郎

松岡磐吉

中濱万次郎

銀五拾枚充  
時服二

右同斷

同前 四人

右御用ハ 御國初以來初而之處航海中格別骨折相勤

右同斷

候ニ付別段爲御手當出役中御扶持方七人扶持被下之

銀三十枚  
時服二

根津欽次郎

右同斷

同 人

銀貳拾枚

亞米利加國ニ御軍艦被差遣候義ハ

御國初以來初而之事ニ候處數千里之航海無滯御用相

勤格別骨折候ニ付別段爲御褒美被下之

右於燒火之間酒井右京亮申渡之

赤松大三郎

岡田井藏

小杉雅之進

銀三拾枚充  
時服二

右同斷

銀貳拾枚充

同前 三人

右同斷

右對馬守之命ニ因リ軍艦奉行木村攝津守申渡之

吉岡 勇平

金貳拾兩  
時服二

小永井五八郎

金拾五兩  
時服二

右同斷

吉岡 勇平

金拾五兩

小永井五八郎

金七兩

右同斷

右於燒火之間酒井右京亮申渡之

木村 宋俊

銀三拾枚充  
時服二

牧山 脩卿

右同斷

前 兩人

銀貳拾枚充

右同斷

右於檜之間對馬守申渡之

海軍歴史卷之九



海軍歴史卷之十

小笠原島開拓之上

目錄

- 開拓之任命
- 咸臨艦乗組ノ人名
- 祝砲ノ指令
- 千秋丸ノ發遣
- 開拓ノ概略
- セイボレ、シヨ―ヂ對話
- 外國人ニ永住安堵ヲ免ス
- ウエヲ對話

セイボレ外二人對話

海龜ヲ捕ルノ法

外人ノ猥ニ獸獵スルヲ禁ス

セイボレ對話

同外一人對話

貨幣ノ見本ヲ示ス

海軍歴史卷之十

小笠原島開拓之上

文久元辛酉年九月十九日於新部屋前溜安藤對馬守申渡

覺

水野筑後守

服部歸一

伊豆國附島之御備向取調且小笠原島御開拓之御用被仰付候ニ付而者都合次第御軍艦に乗組彼地に罷越巨細實檢いゝ厚勘辨之上見込之趣可被申聞候事

小笠原島并伊豆國附島、爲御用咸臨丸御船に乗組被差

遣候御軍艦組名面之義申上候書付

御軍艦奉行

小十人格  
御軍艦頭取

小野友五郎

御軍艦組

鈴木録之助

同

近藤熊吉

同出役

浅羽甲次郎

同

喰代和三郎

御軍艦組

塚本桓輔

同

杉浦金次郎

同

松岡磐吉

同

柴弘吉

同

高橋榮司

御軍艦操練所稽古人

豊田港

同

西川倍太郎

御軍艦取調役下役

壹人

右者此度小笠原島并伊豆國附島、爲御用咸臨丸御船被差遣候ニ付御軍艦組之者夫々人撰仕書面名前之者共々乗組御用申渡候尤此度之義者水野筑後守服部歸一同人共支配向之者多人數乗組相越候ニ付御入用筋其外御取締向取扱候御軍艦取調役組頭同取調役等者不被差遣候而も御差支之義も有之間敷候ニ付航海中諸品入出等取扱之爲め取調役下役壹人差遣、其餘御取締向并御入用筋取扱之義者筑

後守支配向ニ而御用中相心得候積筑後守歸一申談此段申上候以上

酉十月

伊豆國附島、其外に被差遣候御軍艦之義ニ付奉伺候書付

水野筑後守

服部歸一

今般伊豆國附島、其外に被差遣候ニ付而者追々申上候通小笠原島之義者當節外國人共許多移住罷在候趣就而者右之者共之内如何様野心無頼之者罷在私共着島之節輕蔑暴肆之處置無之とも難申右様之徒壹人ニ而も有之其他愚蒙

之者共一般雷同いゝ候様相成候而者不容易義ニ有之左  
候迎御開拓之初め右等之者共一々召捕束縛候様ニ而者一  
体民郷之折合ニも差響候義ニ付再三熟慮仕候處最初  
御國之兵威を輝一彼等寒心破膽感服仕候様無之而者相成  
間敷候間御軍艦へ者大砲其外御武器類充分御備相成候様  
仕度且又同島着岸之節祝砲連發いゝ候様仕度尤祝砲之  
義者先般藤堂和泉守より相伺候趣も有之此程御軍艦奉行  
評議取調中之由且先頃御宅於而亞國ニストル御對話  
之節御國地ニ而者御國人并外國人共打砲不相成海外ニ而  
者彼國習風ニ慣ひ外國人同様御國人迄も御差許と之趣ニ  
御談判相濟居候得共前條小笠原島之義ハ御國版圖中とハ  
乍申既ニ外國人とも移住罷在候義ニ候得者暴肆頑愚之外

國人共震醒威赫之一端とも相成可申哉奉存候右之趣可然  
も被思召候ハ、其段御軍艦奉行ハ被仰渡可被下候依之此  
段奉伺候以上

酉十一月

對馬守下附

覺

大小砲之儀は御船相應ニ相備候様御軍艦奉行ハ打合可  
被取計候且祝砲之義は先ッ見合候様可被致候事

小笠原島御開拓爲御用被差遣候ニ付別船御仕出之義  
申上候書付

水野筑後守  
服部 歸一

小笠原島御開拓爲御用私共并支配向御勘定方一同咸臨丸御船に乘組且同島移民に被下候御手當食料農具其外凡拾人分之見込を以積入持越候得共絶海之孤島に罷越候儀ニ而風土氣候も相違仕且同所邊者世界第一之颶風差起り候難場之旨傳習之蘭人共も教誡仕置候趣ニ而何れ之地に漂着可仕も難計旁以役々衣服食料者勿論日用之調度迄夫々手當いたし移民御手當品も十分持越度候處御船狹隘ニ付乘組人數相減候而も積込方難行届ヶ成用辨丈ヶ漸く積入候義殊更御船ニ而相用候石炭之義も纒六日半丈之數量おらてハ難積貯候由之處風樣ニ寄候而者蒸氣之力のみを以

航海可仕義故八丈島に者立寄兼直さま小笠原島に渡航仕其上ニ而私共并支配向之者共之内移民引移并右之者共假小屋材木運送之ため八丈島に罷越候義も可有之假令八丈島へ立寄候而も小笠原島到着實地見分仕候上當節移住之外國人共御國より人種御移を差障り不申開拓可仕餘地も有之機會取失候而者御手後れ可相成様子ニ候ハ、尙又即時八丈其外之島より移住爲仕候義專要ニ付右之者共呼寄候者勿論不足之食料其外買入候ため何れニも右御軍艦之義者八丈其他之島に航海いたし一通り開拓之基礎相立候様取計可申處纒之石炭ニ付風順宜見込通彼地到着候とも八丈に者冬春之間ハ逆風ニ付蒸氣のみ相用候事故一往返仕候へハ石炭焚盡し候間彼地御用向粗相辨し候而

も歸帆難仕無據數月滯留仕候外無之左候迎右等用意を仕候へ者機會宜候とも八丈之往返も難爲仕空敷傍觀罷在候のみニ付其内ニ者外國人とも御國より御手不届内を爭十分開拓等可仕も難計然る時ハ今般之御所置も無詮事ニ成行往古之御趣意も相立不申恐入候義ニ付右等之手續者幾重ニも差支無之様仕度依之熟考仕候處今般箱館表御買上相成御當地に相廻候健順丸御船ニ者魯西亞國士官水夫等も乗組居候趣且帆前荷船ニ御座候上者荷積等も十分行届可申候間右御船拜借仕私共出帆前後之内石炭其外爲積込同島に向ケ出帆候様仕度尤右御船之義箱館奉行申談候處差支無之趣ニ者御座候得共魯西亞士官水夫方おいて差支有無も難計いまた談判中ニ御座候間若不承知之趣ニも

御座候ハ、千秋丸御船に御軍艦方之もの爲乗組別段御仕出相成候様仕度いつれニも別船荷船壹艘ハ御仕出不相成候而者事實差支候事ニも御座候間申上候義ニ御座候此段早々箱館奉行御軍艦奉行へ被仰渡可被下候依之此段申上候以上

西十一月

覺

別船仕出ノ荷船之義者千秋丸御船に御軍艦方之者爲乗組可被差遣候間得其意御軍艦奉行可被談候事

千秋丸御船小笠原島等へ相廻候義ニ付申上候書付

水野筑後守

井上信濃守

木村攝津守

服部 歸一

咸臨丸御船小笠原島御開拓等之御用として被差遣候ニ付別船御仕出之荷船之義者千秋丸御船に御軍艦方之者為乗組可被差遣旨被仰渡候處右者蒸氣遣石炭を始食料其外欠乏之品用意之ため積込運送いふ候ニ付右等之手數も有之咸臨丸御船之義者八丈島に相越夫より小笠原島に相廻候手續ニ致し候積ニ付千秋丸御船之義ハ咸臨丸御船出帆日限より相後れ候而も差支も無之且外場所航海と違ひ海路乗筋等難路之場所ニ而帆綱具等充分行届不申候而者掛

念之品も有之帆前運轉等差支候義ニ付此程御下知相濟候總具類等得と仕替手繰次第出帆為仕候様可仕候此段申上候以上

西十一月

御軍艦方

鈴藤勇次郎

荒井郁之助

力石太郎

甲賀源吾

御軍艦操練所稽古人

杉島廉之助



御軍艦取調役組頭

柴田隼太郎

同取調役下役

下山逢吉

右者小笠原島御開拓等御用別艦千秋丸御船乗組對馬守殿に申上之上申渡之

大久保越中守に

覺

君澤形壹番六番御船に御軍艦組之もの為乗組小笠原島に被差遣候間御船御修復出來之上御船造掛りより請取早く相廻候様可被取計候事

右之通御軍艦奉行に相達候間可被得其意候事

小笠原島に着仕候義申上候書付

水野筑後守

服部歸一

私共小笠原島御開拓并伊豆國附島に御備向取調として去十二月三日支配向立合御勘定方一同御軍艦操練所より咸臨丸御船に乗組同四日品川沖出帆同日夕浦賀港碇泊船中用水食料等積入同七日朝同所出帆同日暮頃伊豆大島を左手に請針路を南手に取駛行候處同夜より逆風相募り加之潮勢烈敷蒸氣を而押切候得共自然東之方へ被相流九日に至り御船所在測量いふ候處八丈島沖東南之方二十三里

程相隔強而同島之方に向ケ候ニ者風潮共ニ不順ニ付風順見合候上ニ無之候而者御船寄せ兼候趣御軍艦方より申立候間一同評議仕候處蒸氣之力風浪を破り兼候上見据も無之風便を相待數日烈風激浪之内ニ漂ひ居候事も難相成風順ニ任せ候より外無之候ニ付直様小笠原島に相越候事ニ決定以多し猶南の方へ駛行候處折惡敷時化のみ打續逆浪御船之上を打越し候事數度有之十四五日ニ至り候而者小笠原島より東南に被吹流候處漸く南風を得同十九日夕小笠原島内父島に着船仕候依之御届申上候以上

戌三月

小笠原島々巡見御開拓取調候趣申上候書付

水野筑後守

服部歸一

私共儀小笠原島御開拓筋取調爲御用同島に相越去西十二月十九日右島内父島港に着船仕候處同島在留之英人貳人カナカ人種之名壹人小船ニ打乗水先案内として御船に相越候ニ付兼而江戸在留亞國書記官ホルトメンより當島在留之同國人子サ子ルセイボレに届方相願候書翰有之候間承糺候處當時在留以九し全島之取締心得居候由ニ付早速外國奉行支配調役由比太左衛門御徒目付松本三之丞御勘定方上村井善平爲通辨中濱万次郎差遣右書狀爲相届且今般御開拓之御趣意柄粗爲申諭一通爲相糺候處子サ子ルセイボレ義者三十二ヶ年前三乙島より之便船ニ而渡來滯

留いた候義ニ而國命を受相越候譯ニ者無之當時父島在  
留之もの人數三十六人家數拾九軒有之右之内同人并英國  
人シヨ―シホ―ト。ト―マスエツチウエフと申者申合重  
立諸事取計居候よ―申立候段歸船之上申聞候間翌廿日私  
共上陸仕御幕張等爲取補理右子サルセイボレ。シヨ―シホ  
―ト等呼出―一体之御趣意并往古より御國屬地ニ有之  
譯柄等委細申諭候處兼而承及候趣も有之候由ニ而縷々承  
伏いた御國おゐて規則御取極ニ相成候ハ、各尊奉可仕  
旨申立依之持越候用意品之内より政府より被下候旨を以  
別紙之通差遣―私共よりも差遣―且ツ自今御國貨幣取交  
通用申渡相場之義者當節各開港場おいて一ドルヲル大凡  
三拾五六匁替之趣ニ付右ニ准―相定め可申義ニ者候得共

新附之外國人とも御國貨幣割合をも辨へ不申右様端銀有  
之候而者算勘方吞込兼諸買物等差支可申ニ付右端銀切捨  
一ドルヲル三拾匁通用之積を以別紙之通相場相立爲見本  
前書頭立候三人之外家持之者共へ渡遣―尤一島限り之通  
用ニ而尙時々相場増減可有之且渡來之外國船等々者決而  
相渡申間敷旨申諭置將又是迄銘々切開植付いた候地所  
者見分之上持地ニ渡―遣一旦切開候とも植付もの無之荒  
蕪および候場所者取上之御國民移住之者耕作仕付候迄改  
而拜借地同様ニ致―置坪數等別紙繪圖面ニ取調右請取書  
ニ名印爲致置全島取締方規則書并港則等取調相渡是亦請  
書ニ名印いた爲置申候猶支配向之者共者夫々手分け  
た各所上陸爲致持越候木材ニ而假御役所取建其他者外

國人納屋等假受止宿いたし右地所取調方ハ勿論山道等爲切開當二月ニ至り粗取調方相濟候ニ付同月十日母島ハ相越同島在留英人シユームシマツレ初前書同様申渡別紙之通御用意品之内より被下物取計私共よりも差遣切開候畑地者見分之上父島同様持地ニ渡遣し別紙繪圖面之通受書名印爲致取置申候同月廿六日父島ハ罷歸り猶又御開拓筋取調申候

一体小笠原島ハ北緯二十七度余東經百四十一度余之場所ニ而父島者周圍十里程母島ハ九里程ニ而別紙測量之通有之格外廣地も無之候間郡を立區別仕候ニも及間敷古記録中父島三村母島一村ニ分ち村名をも相立居候義ニ付右舊名相用尤母島之方者南北ハ長く港も兩岬ニ分れ居候而一

村ニ而者不都合ニ付兩村ニ引分ケ村名相定め其外山川等名目者舊記ニ有之候分ハ其儘相用其他ハ夫々新名相名付兩島居住之者へ相心得させ相渡置且住民戸口取調候處何れも別紙之通御座候全体同島在留之外國人共何れも軍艦鯨漁船等ニ而水夫働いたし居候もの共老衰疾病等ニ而暇出候族ニ而下賤之者ニ有之身柄有之國命を受開拓ニ相越候もの迎者壹人も無之其余カナカ人ニ至りてハ右等之輩奴隸同様之姿ニ而御軍艦御差渡相成御國おゝて御開拓方御座候事難有存居候様子ニ相見へ御懷柔之御趣意十分相貫御都合宜敷父母島之外兄弟島を始小島にも罷越見分仕候處何れも人家者無之候得共中ニ者相應之畑地出來可申見込之地所も有之海中者鯨魚多分ニ而島々巡見之都度々